

令和 3 年 7 月 3 0 日

資料提供

担当課室	農業環境・鳥獣害 対策室	農作物病虫害防 除所
担当者	大谷	岡本
電 話	073-441-2905	0736-64-2300

病虫害発生予報 第5号(8月予報) について

令和3年度病虫害発生予報 第5号(8月予報)を別添のとおり発表します。

病害虫発生予報 第5号（8月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並
	紋枯病	並		シロイチモジヨトウ	並
	縞葉枯病	並	カンキツ	黒点病	並
	ヒメトビウンカ	やや少		かいよう病	やや少
	ツマグロヨコバイ	やや少		ミカンハダニ	並
	セジロウンカ	並		ヤノネカイガラムシ	やや少
	トビイロウンカ	並		チャノキイロアザミウマ	並
	イチモンジセセリ	並		ゴマダラカミキリ	並
コブノメイガ	並	カキ	炭疽病	やや多	
斑点米カメムシ類	並		うどんこ病	やや少	
トマト・ミニトマト	疫病		並	円星落葉病	並
	黄化葉巻病		やや少	角斑落葉病	並
野菜全般	アブラムシ類	やや多	フジコナカイガラムシ	やや多	
		ハダニ類	並	果樹全般	カメムシ類
	ミナミキイロアザミウマ	並			
	ミカンキイロアザミウマ	並			

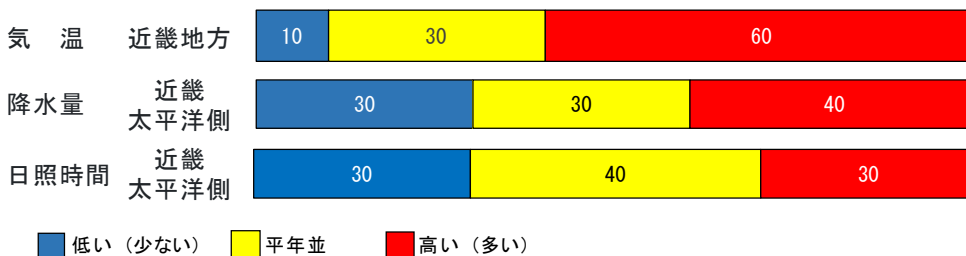
気象予報

近畿地方 1か月予報（07/24～08/23）

2021年07月22日14時30分 大阪管区气象台 発表		
特に注意を要する事項		2週目は気温がかなり高くなる可能性があります。
向こう1か月 07/24～08/23	天候	近畿日本海側では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
	日照時間	日照時間は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 07/24～07/30	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目 07/31～08/06	気温	2週目は、高い確率60%です。
3～4週目 08/07～08/20	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



I. 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率28%、発病株率5.7%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は29%（平年17%）、発病株率は6.2%（平年3.3%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。

② 常発地では翌年から罹病性品種の作付けを避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、発病株率0.1%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率2%、発病株率0.2%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 穂ばらみ期に発病株率が20%以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。

② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率3%、発病株率0.1%）であった。

③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量はやや少と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 本病の発生が多いほ場では、ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では2.0頭（平年7.8頭）、県北部および中部の普通期栽培では0.8頭（平年12.6頭）であった。

② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市3頭（平年2.1頭）、上富田町1頭（平年0.9頭）、那智勝浦町0頭（平年7.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 縞葉枯病の発生が多いほ場では、本虫の防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では2.5頭（平年2.4頭）、県北部および中部の普通期栽培では1.0頭（平年1.6頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平年1.9頭）、上富田町8頭（平年29.7頭）、那智勝浦町47頭（平年230.5頭）であった。

6. セジロウンカ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では10.5頭（平年31.4頭）、県北部および中部の普通期栽培では4.7頭（平年16.7頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市42頭（平年18.0頭）、上富田町39頭（平年67.2頭）、那智勝浦町34頭（平年51.1頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に株あたり成幼虫10頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

7. トビイロウンカ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0頭（平年0.1頭）、県北部および中部の普通期栽培では0.3頭（平年0.2頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平年1.7頭）、上富田町2頭（平年17.5頭）、那智勝浦町22頭（平年20.4頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。
- ② 令和3年度病害虫防除技術情報第6号（7月20日発表）を参照する。

8. イチモンジセセリ（イネツトムシ）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたりツト数は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0（平年0.1）、県北部および中部の普通期栽培では0（平年0.0）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢幼虫の防除に重点を置く。

9. コブノメイガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0葉（平年1.3葉）、県北部および中部の普通期栽培では0葉（平年0.2葉）であった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1日～7月20日の誘殺数は1頭（平年1.2頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10

%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

10. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は2.5頭（平成5.3頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市26頭（過去5年の平均91.2頭）、上富田町31頭（平成27.0頭）、那智勝浦町202頭（平成79.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにはほ場周辺を除草する。
- ③ 出穂後、本田内で大型のカメムシ類の飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）に薬剤散布する。

※ 水稲害虫の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

II. 野 菜

<トマト・ミニトマト>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成10%）であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。
- ② 露地栽培では、降雨前の予防散布に努める。降雨前に散布できなかった場合は降雨後に早急に防除する。

2. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月中旬の発生ほ場率は13%（過去8年の平均43%）であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
- ② 施設栽培では育苗ほ、本ほとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防止する。
- ③ 施設栽培では、定期的な薬剤散布および定植期の粒剤処理により、育苗期から本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の生息葉率は、ワタアブラムシ1.0%（平成0.8%）、モモアカアブラムシ5.5%（平成0%）であった。

② 黄色水盤（紀の川市）への7月1～20日までの飛来数は65頭（平成10.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、カンザワハダニでそれぞれ13%（平成25%）、0.5%（平成6.8%）、ナミハダニでそれぞれ25%（平成12%）、2.0%（平成2.8%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、それぞれ38%（平成18%）、3.5%（平成3.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。

② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

④ 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、それぞれ13%（平成1%）、1.5%（平成0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率3%、生息葉率0.1%）であった。

② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、和歌山市93頭（平成160.4頭）、紀の川市117頭（平成93.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。
- ② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

6. シロイチモジヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市23頭（平年19.4頭）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の果実の発生ほ場率は27%（平年25%）、発病果率は6.0%（平年4.7%）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。
 - ② 伝染源となる枯れ枝や剪定枝の処理を徹底する。
 - ③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯れ枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。
 - ④ 令和3年5月21日発表の病害虫防除技術情報（第2号）を参照する。

2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の春葉では発生ほ場率は17%（平年31%）、発病葉率は0.4%（平年1.3%）であった。
 - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 台風の接近等で強風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
 - ② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。
 - ③ ミカンハモグリガによる新葉の食害痕は病原菌の侵入口となる。幼木や高接樹では新葉が発生しやすいため本害虫の防除を徹底する。
 - ④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬

の発生ほ場率は15%（平年24%）、発生葉率は6.4%（平年6.4%）、100葉あたり雌成虫数は26.6頭（平年21.1頭）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第2世代2齢幼虫の発生最盛期は8月中旬頃と考えられる。発生ほ場ではこの時期に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均1%）、果実の被害ほ場率は17%（過去8年の平均18%）であった。

② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる7月1～20日の誘殺数は由良町49頭（平年238頭）、有田川町86頭（過去7年の平均135頭）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

② 発生ほ場およびイヌマキやサンゴジュに隣接するほ場では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 成虫の捕殺に努めるとともに、放任ほ場周辺など発生の多いほ場では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬液を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」3.2%（平年0.1%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年0%）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。

② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかつたほ場で

は台風通過後速やかに散布する。

- ③ 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」47%（平成66%）、
「平核無」・「刀根早生」12%（平成22%）であった。

② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」3.5%（平成6.4%）、
「平核無」・「刀根早生」0.7%（平成1.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪いほ場は発病を繰り返しやすいので、これらのほ場では秋雨前の予防散布に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は0%（平成43%）、発病葉率0%（平成5.3%）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 子のう胞子の飛散が続く8月上旬まで防除が必要である。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は77%（平成68%）、発病葉率は11.2%（平成12.2%）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発ほ場では発病後も防除を励行する。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は、「富有」71%（平成52%）、
「平核無」・「刀根早生」29%（平成14%）であった。

② 県北部における7月中旬の寄生果率は、「富有」4.5%（平成4.7%）、
「平核無」・「刀根早生」2.2%（平成0.6%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の直前に薬剤散布を実施する。

② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月下旬頃であり、ふ化幼虫発生盛期の直前は8月上旬頃と思われる。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市粉河の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが259頭（前年306頭、平年416頭）、ツヤアオカメムシが34頭（前年207頭、平年132頭）であった。
- ② 有田川町奥の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが45頭（前年113頭、過去7年の平均839頭）、ツヤアオカメムシが17頭（前年119頭、過去7年の平均189頭）であった。
- ③ みなべ町東本庄の予察灯における7月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが211頭（前年118頭、平年927頭）、ツヤアオカメムシが51頭（前年196頭、平年270頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接ほ場では早くから被害が出やすい。
- ② ほ場内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病害虫防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病害虫防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780